

招待発表

芭蕉俳諧の時間性

Time in Basho's *haikai*

李 栄 九*

This thesis is an explication of *mono* (thing) and time as they appear in the poetry of Matsuo Bashō (1644-1694).

The concept of time is fundamental to Basho's poetry, but because Basho was a poet and not a philosopher, we can learn of his conception of time only as it is expressed in his poetry, or in the fragmentary records of his disciples. The speaker's interpretation is guided by these sources.

Bashō perceives "being" in relation to time. The "being" of a thing discloses itself only in the presence of time. Time is being. "Being" means remaining in the present, and time is the place of "being".

This interpretation of time in Bashō's poetry arises out of the concepts of *sei to dō* (quietness and movement) *fueki-ryūkō* (immutability and change) and *mujō* (mutability).

Sei to dō can be compared to *fueki-ryūkō*.

Unchangeable *sei* also reveals itself as changeable *dō*. And *fueki* in reality exists in *ryūkō*. If time, that is "ryūkō", does not

* 李 栄九 崇田大学教授

exist, the “being” of a thing conceals itself and cannot encounter the poet. Time allows “being” to disclose itself to the poet. “Being” reveals itself only according to time, from moment to moment. Moment by moment, only “being” confronts the poet. When Basho said that a poet should remain at “the moment”, he was referring to the present.

These ideas underlie Basho’s *mujōkan*, or concept of mutability.

1. 序

元来、創作の世界である俳諧芸術にとって論理的思惟とか体系的理論が必ずしも必要なわけではない。芭蕉は勿論、僧侶でも哲学者でもなく、同時に蕉門の人々も思辨的訓練には慣れていない俳人である。厚為あて杉風の書簡に見えるように、俳諧に論は要らず、ただ吟じて楽しめばよいのである。

しかし、他流と比べて、単に創作の技術面の相違だけでなく、俳諧の本質についての吟味と独創性があればこそ、蕉風は新風または正風といわれ、また長期にわたり研究の対象となるのではなからうか。

とはいっても、俳諧の本質に関する具体的、体系的説明は芭蕉の俳文にも、蕉門の俳論書にもみられない。ただ片言隻語からなる断片的言及と引用文例などが残っているだけである。

この断片的文献を手がかりにして芭蕉の俳論に、一貫した論理性を与えるということは非常に難しいことであり、場合によっては飛躍の危険が伴うことでもある。

この危険を極小化させるためには、芭蕉の用語または弟子に対して行なった教説の個別的解釈にとどまらず、芭蕉思想の全体的・統一的理解が何よりも必要であると思う。

ところで芭蕉は俳諧の形で表現される“もの”について、独特な形而上学

的見方をしている。即ち“もの”または“自然”を単なる事物とか感覚的対象と見るのではなく、その“もの”の本相または本性について思索し、同時に、その“もの”の本性を動的なものとして捉えた跡がみられる。勿論、芭蕉及び蕉門の用語の中に“時間”という言葉はない。また、果たして芭蕉が俳諧芸術の本質を動的、または時間的立場から自覚的に考えたという直接的な證據もあるわけではない。

しかし、芭蕉にいつもつきまっていた無常観、“静”と“動”についてのいくつかの記録、さらにその基本思想といえる“不易・流行”などの概念は、芭蕉がものの本性とその時間性を詩的直観により了解していた可能性を示唆するものではなからうか。

本稿はこのような芭蕉の形而上学的側面からの解明を試みたものである。

2. 静と動の時間性

芭蕉俳諧において、静と動は特別な解釈を要する。

先ず、静とはただ停止しているもの、または単なる客観的対象を意味しているのではない。同時に、人間の私意によって構成され、表現される志向的事物でもなく、芭蕉によれば、ものの存在自体のことである。あるものの本性のことであり、人間主観の領域外にある、ものの自在性のことである。

三冊子（赤）に次のように記されている。

「師の曰、乾坤の変は風雅のたね也といへり。 静なるものは不変の姿也。 動けるものは変也。 時として止めざればとどまらず。 止るといふは見とめ聞とむる也。 飛花落葉の散乱るも、その中にして見とめ聞とめざれば、おさまることなし。」

天地万物の変化流転そのものが俳諧の要素であり素材である。静とはものの永遠な自得の姿のことである。そして動とは永遠に変化する途上のものである。ある瞬間においてこの変化を断ち切らなければ動は停止するものではない。勿論、この流転を停止させるのは詩人（俳人）である。詩人は流転の

相において、天地万物の真理を見とめ、聞き止めるためである。飛花落葉(万物の流転変化)もその本相において真理として捉えなければ俳諧にはならない。

以上のような三冊子の言葉から次の解釈が可能になってくる。静とは自然万物の自得不変の姿である。流行変化にも拘わらず、自在性を維持するものの本性のことである。とって、この静は固定的な実体、現象の永遠な他者としての実在性を意味しているのではない。自得という本相のものではあるけれども、千変万化する途上の存在である。飛花落葉・乾坤そのもの自体ではあるが、動、即ち変化の相においてあるものである。

ところで、芭蕉によれば、ものは単なる客観ではない。もし、“もの”が主観の表象作用によって対象化されるものであれば、物自体の原理は認められず、どこまでも主観の構成的・志向的意識に従属する、いわば“作りもの”“作られたもの”に過ぎない。ものは人間主観に左右されない自得の存在原理をもっている。主観を捨てて脱自的に物の前に立つ時、ものの秘密はおのずと現われるのである。芭蕉はこの事を常に戒しめていたらしく、三冊子に「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ…」と土芳は書いている。このことは私意即ち、主観の表象意識を断ち切って物からさしてくる存在の真相のひかりを、見止め、聞き止め、言い止めるという意味である。これが芭蕉の説いていた“句作になる”誠の俳諧であった。去来抄の

「ものより自然にでる情にあらざれば物と我二つになりて其情誠にいたらず」ということも、ものを自体の存在として人間の表象意識から切り離して捉えている證據である。

そこで蕉門では、ただ、物とは言わず、“物の本情”(去来抄)“物の本性”(去来抄)“物の微”(三冊子)という特別な表現をしばしば使っている。これは物を感覚的事物としてみるのではなく、ものの自得の原理という立場からとらえていることを意味している。

芭蕉の静とはいいかえればこのような“物の微”“物の本情”の姿を指して

いるのであり、これは即ち、天地造化そのもののことをもいっているであろう。

これに対して動とは何であるのか。動とは運動の持続とか進行を意味するものではない。または、静を動かす原動力として静の他者としての要因でもない。不変である静そのものの顕われであり、乾坤の自己開示のことである。天地万物がそのものとして、その都度、あらわれる現在瞬時のことである。いいかえると、ものの存在の時間的現成であると解釈できないであろうか。

不変（静）である、ものの本性はいつも変（動）として自己を露呈している。不変が変にわたり、静が動となるとところに造化の妙があり、自然の理が成り立つ。この妙理を見とめ、聞きとめるところに真の俳諧の世界が開ける。

芭蕉によれば、物の本性、本相は私意によっては捉えられない。ものは自体の存在原理を保っている。私意が働けば物と我は二つになる。ものは人間の作意の前では構成された物（つくりもの）に過ぎず、ものの本情はかくされてしまう。私意を捨て、脱自的に物に立ち向かう時、即ち物に应ずる時、ものは「活たるもの」（三冊子）として、また「見えたるひかり」（三冊子）として、ものの側からおのれの存在を顕わにさせるのである。この「活たるもののひかり」を言語で言い止めるのが詩人（俳人）であり、この発言が句になるのである。

芭蕉の句作についての基本的態度がこのように解釈できるとすれば、物の微（物の自得性）は常に動態として自己を開示している。故に動とは静の反対概念でなく、静のあらわれであり、静の到来を告げるものである。つまり、静の自己表現ともいえるのであろう。この動こそ、現代的用語を借りて時間といってもよいものではなかろうか。

3. 不易・流行の時間性

以上、静と動について、筆者なりの解釈を試みたわけであるが、静と動の思想に対応する不易・流行について、時間の立場から掘り下げてみることに

する。

不易・流行については蕉門の俳論書にはいたる所に記録が残っている。しかし具体的説明の欠けた言及だけで、当時の蕉門でもこの思想をめぐってずいぶん議論があり、見解が一致していなかったようである。

去来のことばによると、不易・流行の思想は元禄二年の「奥の細道」の旅中に芭蕉が説いたとなっていて、芭蕉の比較的後期の思想であることには間違いない。とすると、「まこと」「さび」などの俳諧概念と前後関係から理解するのが正しいと思う。即ち、まことの俳諧という蕉風を確立した後、芭蕉は俳諧精神を深めて行き、「まこと」「さび」などの概念と矛盾せぬ、むしろそれらの概念の包括的概念として不易・流行を説いたのではなからうか。

では、不易・流行の意味はどういうものであろうか。

「師の風雅に万代不易有。一時の変化あり。この二つに究り、其本一也。その一といふは風雅の誠也。…不易といふは新古によらず、変化流行にもかかわらず、誠によく立たる姿也。」（三冊子）

「句に千載不易の姿あり。一時流行の姿あり。……不易の句をしらざれば本たちがたく、流行の句をまなばざれば風あらたまらず。」

（贈晋子其角書）

「不易は古によろしく、後に叶う句なれば……流行は一時一時の変にして……」（去来抄）

以上、土芳・其角・去来の三人の文献に従うと、次のような通俗的解釈がなりたつ。不易とは永遠不変で超時代的なものを芸術の対象とすることであり、流行とはその表現において、陳腐な伝統的形式でなく、時代感覚にあう言語と様式をとるということ、つまり不易・流行とは俳諧作法の時代性を意味するということである。一時の気風を超越した古風と伝統の精神を重んじ

ることが不易であり、時流に合わせて、斬新な表現をすることが流行であるといったような解釈である。

しかし、不易・流行の真義がこのような句作の作法に関する技術的意味だけであるとすれば、別に難解なものでもなく、蕉門の間で多義的に解釈される危険もないはずである。また、芭蕉独特の思想とも言えないし、芭蕉に始まったとも言えない。むしろ深奥な思想であるために弟子たちの理解の能力に応じて説いたので、それを体得できなかった門人たちは芭蕉の教説を平面的に受け入れ、記録しておいたものとも考えられる。

そこで、芭蕉の他の思想との全体的な関連（例えば静と動などの思想）を通じて、別の解釈を筆者は試みたい。

不易とは超歴史的なもの、物それ自体、即ち天地万物の真相のことであり、流行とは相対的なもの、転変するもの、即ち天地万物の現われのことである。前者が自己同一性であり、静的なものであるとすれば、後者は、そのものの動態のことであり、時間性のことである。そしてこの二つは他者でも、対立者でもなく、同一者の構造的的一面であり、物そのものの本性顕現の方式ともいえるのである。不易とは物の根源性であり、流行とはその根源性を現成させる転変であると同時に根源性自体の動きである。

このような筆者の解釈を裏付ける文献を、土芳と支考と去来の別の言葉から探してみることにする。前節で引用した三冊子のことば「静なるものは不変の姿なり……」はそのまま、不易・流行のことにもあてはまると思う。不易を、静（不変）に、流行を動に対応させて考えると、前節で述べたような一体性という帰結が生れ、そこで不易・流行は「其本一也（三冊子）」といえるのではなかろうか。また支考の「二十五箇条」に、「万物は虚にいて変に働く、……変化は虚実の自在をいふなり。」とある。これは万物の現われ方についての言及であるが、虚を不易、実を流行に対応させて考えてもいいであろう。万物は虚としても、実としても変化において自在するものである。

なお、去来抄のことば、「あらし人体にたとへていえば、先不易は無為の

時、流行は座臥行住屈伸伏仰の形同じからざるが如し。]では、不易と流行の一体性がはっきりしてくる。無為の時でも人体としての真理は自己同一性を持つ。人体自体は不変であるが、しかし必ずある様相としてあらわれる。座臥・屈伸などのある様態として現われない人体は考えられない。様相、つまり変化としての流行は、従って実在の仮象的現象ではなく、不易自体の動きであり、不易の自己表現といえる。不易・流行は形式論理的に分離される他者ではなく、存在顕現の方式である。

不易・流行は一般的に理解されているように、俳諧の作法に関するものでなく、自然存在の本来的なありかたについての形而上学的思想と解されてもよいであろう。不易は天地万物の本来性、乾坤自体、物の真相、自立自得するもののものであり、流行は天地万物そのものの、その都度の現われとしての変化を意味する。即ち、時間或いは歴史のことであると解釈できないであろうか。不易と流行は、実在と現象といったような二元的なものではなく、永遠なものの時間的現成を意味している。故に「千変万化するは自然の理」であると三冊子では述べているのである。万物は自己恒常性として、固定された実在ではなく、常に流行として、動として、時間として自己の本相を維持しながら現成する。

変化は虚、実の自在であり、千変万化は自然の理であるから、不易は流行として転変し、流行として自己をあらわす。そしてその本は二つでなく一つである。これは不易は流行においてだけ自在するということであろう。即ち、万物の真相は時間性として現成するのである。

4. 無常の意味

芭蕉が自己の風雅と人生を、西行・宗祇・利休などの芸道とつながるものと考えた裏には勿論日本文芸の伝統性の中に己れを見出すということであるが、他方中世的無常の観念が強く芭蕉に作用していたことをもほめかしている。土芳の三冊子に「……無常の観、猶亡師の心なり」とあるのはこの事

を語っている。芭蕉は一所不住の旅の生活を実践し、また、俳文と句のいたるところで現世的なものの流転変化や無常について述べている。芭蕉にとっては、人生も歲月も物もすべて無常迅速の幻影のようなものであった。しかし芭蕉の無常意識は、夢幻のようなこの世のはかなさを詠歎的に受容したものでなかった。消滅し、亡び去るものについて、悲哀と感傷をのり超えた淡々たる静観であった。芭蕉は無常を謙虚に引受け、無常において真理を発見した。無常は事物の真理であり、人間の避けられない宿命である。諸行無常、万物流転・飛花落葉は普遍的真理であるということを諦観し、現世的な執念俗心をはなれた世界で、芸術の美と、事物の真理とを探究しようとしたのが芭蕉の願いであった。

芭蕉が果たしてこのような達観の境地にまで入ったとは勿論はっきりとは言えないけれども、人倫草木を流転の相において、即ち、限りあるものとして捉えたことは確かである。

存在者のすべてを無常なるものとして受け入れる時に存在者の真理はあらわれる。諸行無常が万物の真相であるということを悟った場合、万物は有限的なものであるという立場において、自然の造化に随うことができ、感性的無常がのり超えられる。北枝のことは、「蕉門正風に志あらん人は……天地を右にし、万物山川草木人倫の本情を忘れず、飛花落葉に遊ぶべし、其姿に遊ぶ時は、道古今に通じ……」（山中問答）は、芭蕉の言葉とそうかけはなれたものではないと思う。心敬がすでに使っていた飛花落葉とは言うまでもなく万物の無常のことである。この無常を自然の理法として受容すれば、感覺的虚無感と一切の執着は切断され、無心所住の境地が開ける。この境地において古今の道に通じ、万物の本相がおのずと現われる。飛花落葉としての無常は、“もの”の真理、自然の造化、そして人間の宿命、世界の運行のことである。無常とはただの事物の移り変わりのことでなく、歲月の流れの瞬間において“もの”がそのものとしての本来性を顕わにさせる存在論的意味での時間とはいえないであろうか。

ところで芭蕉にとって、俳諧芸術で表現されるのは、知覚の対象としての事物でなく、ものの本性、即ち、ものの真理であった。人間の世界と山川草木にいたるまで、すべてがおのれの本性を保っている。そして本性は自在・自得と自己顕示の様相を呈する。

支考が「有情のものはさらにいわず、無情の草木瓦石より道具・表色にいたるまでおのれおのれが本情をそなへて……………その本情にいたらぬ人は月華に対して月花を知らず」(続五論)といているように、万物の本情についての句作こそまことの俳諧であったのである。

芭蕉によれば、物の本性、自然の理は、今述べたように無常、即ち有限的なもの、時間的なものであった。同じ続五論での支考のことは「春の花と咲き、秋の木葉とおつるものとのどむまじきは自然の理なり」ということである。

芭蕉における無常とは、事物の生成消滅の感性的受容という立場ではなく、無常こそ万物の本相であり、流転変化こそ造化の姿であるということの意味する。いいかえると万物は有限性として変化流転を本質とするものであり、動態として顕現するものである。これは静と動・不易と流行の思想と同一線上の思考として考えられないだろうか。

「造化にしたがひ、四時を友とす、見る處花にあらずという事なし。思ふ所月にあらずといふ事なし。……………造化に随ひ造化に帰れとなり。」(笈の小文)と芭蕉自身がいているのは、流転の相における存在把握の思考をよりはっきりと示している。造化とは形而上学的実在ではなく、一切のものが、そのものとして開示される理法と秩序のことである。したがって、造化への随順は無常としての“もの”に、不易・流行としての“もの”に脱自的に超越をすることである。

以上、芭蕉の“もの”についての考え方と、静と動、不易と流行、無常の概念を、根源的には時間性として捉えたのであるが、これほどこまでも一外

国人の目からみた、芭蕉俳諧についての現代的解明の一つの立場であって、必ずしも文献による考證ではない。ただ、佛頂和尚に師事して参禅をしたことのある、芭蕉の佛教的性向を背景とした、詩的直観の世界を、蕉門の俳論を中心にして、存在論的角度から解釈を試みたまでである。

討議要旨

小西甚一氏より、発表者の説に賛同する旨の発言があり、我々は時間という時計ではかるような時間を考えがちだが芭蕉の時間性という場合は、もちろんそうではない。時間というものをどのように考えているか、との質問があり、発表者より、あえて哲学的に言えば存在のあらわれとしての時間であり、ある物が人間と出会う場合必ず時間という地平を通してあらわれる。存在をあらわさせる地平であり場所である、との発言があった。井本農一氏より、発表者とほぼ同じ見解をかつて書いたことがあるが、時間性という観点で不易流行をとらえ、更に「静と動」、無常ということを体系化したことに敬意を表する旨の発言があり、呂丸の『聞書七日草』について言及があった。発表者より、今回の発表は主に支考の考えに立っての発表である旨の発言があった。